

M-GTA 研究会 News letter no.30

編集・発行：M-GTA 研究会事務局（立教大学社会学部木下研究室）

メーリングリストのアドレス：grounded@ml.rikkyo.ne.jp

世話人：阿部正子、小倉啓子、木下康仁、小嶋章吾、坂本智代枝、佐川佳南枝、塚原節子、
林葉子、福島哲夫、水戸美津子、山崎浩司

<目次>

◇夏合宿報告

◇新刊のご案内

◇近況報告：私の研究

◇連載・コラム：『死のアウェアネス理論』を読む（第6回）山崎浩司

◇編集後記

◇ 夏合宿報告

7月26日、27日と土日の1泊2日で山梨県の竜王、神の湯温泉にて研究合宿を行いました。光村美香さん提供のデータ2名分を元に2つのグループに分かれて、分析テーマの設定から概念・カテゴリー生成、関係図作成までを行いました。同じデータをもとに2グループで異なる分析テーマが設定されました。ここに、参加された皆さんから感想を寄せていただいています。参加されなかった皆さんにもきっと参考になることがあると思います。

.....

「M-GTA 研究会夏合宿にデータを提供して」

光村実香（金沢大学大学院 医学系研究科 保健学専攻 博士後期課程）

昨年、一昨年は阿部先生がデータ提供者でしたが、今回は私がデータを提供させていただきました。今回、提供させていただいたデータは、一昨年前に修士論文の為に収集したものでした。最終的に、修士論文を書き上げる際には使用できませんでしたが、その語りは非常に印象的で、興味深い世界が描かれていました。内容は、通所リハビリテーション（以下、デイケア）という限られた時間の中で、そこに従事する理学療法士や作業療法士ら（以下、セラピスト）が病院やその他のリハビリとは異なる独自のリハビリ観を持ち、それを実現する為の利用者・他職種との様々な関わりが描かれていました。

修士を卒業してから「せっかくのデータを無駄にしてはいけない。ご協力いただいたセ

ラピストの方々の為にも、何らかの形にして臨床の場へ返したい」との思いはあったものの、なかなか実行に移せず、2年が過ぎようとしていました。重い腰をあげ、今年の3月頃からようやく、データの分析に着手しました。分析方法は、研究会に参加したり、M-GTAの本を読んだり、時にはM-GTA経験者の方にお話を伺いながら作業を行っていましたが、雲を掴むような感じでデータと直接的に向き合っている実感が持てませんでした。そこで、佐川さんにご相談し、今回の合宿でデータを提供させていただくこととなりました。

合宿では、2グループに分かれて同じデータから「分析テーマの設定」「概念の抽出・作成」「概念間の関係図作り（カテゴリー作成）」などの作業を行い、所々でお互いのグループの成果を確認しながら進んでいきました。各グループには2人ずつのコーディネイター役の方がつき、実際に生データを一緒に読み込みながらディスカッションを重ね、学習を深めていきました。はじめに「データ提供者の研究概要説明」があり、事前に届いている研究概要と照らし合わせながら、本研究に関する細かい情報の刷り合わせや用語の確認などを行いました。私の中で印象的だったのは「自立支援という言葉の曖昧さ」を指摘されたことです。そもそも、本研究の出発点は「介護職とセラピストでは『自立支援』の捉え方が違うのではないか。その為、協働して利用者への自立支援的関わりを行う際に困難を生じるのではないか」という部分だったので、これを根底からひっくり返されたような衝撃的な意見でした。確かに、皆さんとの論議を振り返りながら再びデータを見ると、同じセラピストの中でも自立支援に対する価値観や捉え方は賛否両論で、誰一人同じ方はいませんでした。私の中の「自立支援とはこうである！」という強い思い込みが、分析を行う上で一番重要な「データに即して」という部分を実践できていなかったのだと深く反省しました。

分析テーマの設定の仕方や概念の生成方法などについては、研究会に参加して勉強しているので、多少理解できていると思っていましたが、実際のデータを用いて作業を一つずつ丁寧に確認していくと、誤った解釈が多いこともわかりました。まだまだ学習が浅く、研究会に「参加したこと」だけに満足して、いかに「わかったつもり」になっていたのかを痛感しました。

今回の合宿で一番良かったと思うのは「現象特性」と「概念の生成」について詳しく理解できたことです。この2つは、合宿参加前に一人で作業を行っていた時「現象特性って何をどう書けば良いのか全くわからない」、「どのレベルで概念を抽出すれば良いのだろう」、「概念名はどこにヒントを得てつければ良いのだろう」と一番苦しんだ部分でありました。合宿では、同じグループの方々と話し合いながら考え、コーディネイターの方々に助言や導きをいただきながら作り上げていくことで『思考のドツボ』に入り込むことなく、冷静に作業方法を学ぶことができたと思います。また、他の方の意見を聞くことで、新しい発想にもつながっていく感覚を知ることができました。

このような気づきや経験は、木下先生やコーディネイターの方々が私たちのペースに合わせて時間をかけながら、丁寧に指導してくれたからこそだと思います。また、合宿の構

成として各グループで別々の分析テーマを設定したことで、出てくる概念やその関係性が異なり、データを様々な角度から考える良いキッカケになりました。いつもの研究会と比べ、参加者の方々とデータについて時間をかけ濃密に話し合えたことも、学習をより重厚なものにできた要因だと思います。さらに今回の合宿では、M-GTAの研究手法のみならず、学習の場以外でも色々な方の研究の話や悩みを聞いたことで、精神的にも触発され、良い刺激をたくさんいただきました。

今回のこのような有意義な機会をいただき、参加者の皆さんに多くのアドバイスや貴重なご意見、ご指導を頂戴したことを深く感謝いたします。皆様のご協力を無にしないように、夏の間に作業を進め、今年中の研究会で結果をお伝えしたいと思います。

.....

大塚綾子（新潟県立看護大学）

夏合宿からしばらく過ぎましたが、皆さんお元気でしょうか？

2日間有意義に過ごさせていただきました。1日目の予定ではカテゴリー生成までということでしたがグループではそこまで至らず、夕食後にもう一度集まるということでした。しかし、おいしいお酒やワインの誘惑には勝てず、先生や皆さんとの会話であっという間に時間が過ぎてしまいました。私は質的研究は初心者なので、最初は「敷居が高いとろに來てしまった」という思いがあったのですが、先生が以前新潟に來られたことがあることをお聞きし、それだけで親しみを感ずてしまったり（私は新潟県出身なので）、疑問に思っていたことなど他の参加者の方にお聞きすることができたりと、2日間、実際に分析方法を体験して学んだことに加えて、そういった会話から得たものは大きかったと感じています。

次に、今回学んだことについてですが、【分析テーマの絞り込み】が重要だということを知りました。私たちのグループでは、もう一度データを読み分析テーマが的を得ているかどうか検討し、最終的に「療法士が理想とするケアを協力者としての介護者に実践してもらうプロセス」という分析テーマに設定しました。その後【概念生成】のときには分析テーマの中に含まれている言葉を手がかりにデータを読み【ヴァリエーション】となりそうなところを大づかみにとらえて【定義づけ】【概念生成】するという作業でした。【結果図】を描く時にも分析テーマを基に考えていきました。分析テーマがずれてしまうとその後の作業にも影響するということが実際にやってみて理解できました。東京の研究会に参加していたときは断片的だったものがやっと、頭の中でつながったという感覚でした。私は、データの切片化をする分析をした経験があったのですがそれをする中で言葉の意味をどうとらえたらいいのか迷うことがありました。でも今回大づかみにとらえることでデータの意味を大切にすることができたなあと感じ、だから分析焦点者から見た時に、動きのある結果図を描くことができたのだと考えました。また、1人ではこのような動きのある言葉は思いつかなかったと考えます（他の参加者の方も話しておられましたが）。2日間皆さんと一緒に検討する中で気づきや考えかたも共有できました。ありがとうございました。

大西潤子（武蔵野大学）

今年の合宿参加者は新人が優先とのことだったので、お知らせ後数日は申し込みを躊躇していましたが、もし枠があいていたら・・・と思い切って申し込みをさせていただきました。やはり参加して良かったと思える合宿となりました。

送っていただいたデータは2ケース。前日まで仕事を立て込んでいたために深く読み込んで参加することはできませんでしたが、開始して間もなく研究動機と目的が、データ提供者の説明と参加者からの質問により明らかとなり、データの示すところが理解しやすくなりました。分析焦点者は3職種の療法士であることを全員で確認し、グループごとに分析テーマの絞り込みにかかりました。Bグループは「療法士が理想とするケアを協働者としての介護者に実践してもらう（させる）プロセスの研究」としました。デイケアという限られた時間の中で、療法士はどのようにしたら効果的な時間を利用者の方に提供できるかを賢明に考えている、そんな様子が療法士の語りから（私には少し荒い鼻息も・・・）捉えられたため、分析テーマとしては（させる）の表現も良いのではないかと考えました。

グループで時間を要したのは、概念の生成です。1日目には、きちんとした概念名・その定義・バリエーション等そろったワークシートを作ることができませんでした。こんなことで2日目を迎えられるのかしら・・・と思いつつもゆっくり温泉につかり、参加者同士語り合い・・・そして迎えた2日目でしたが、アッという間に結果図まで書けたのです。それは、1日目メンバー同士のディスカッションで、分析テーマに基づいたデータの読み込みができていたこと、概念名の表現よりまず定義を大事にしながら組み立てたことによるものです。「組み立て」と表現したのは、まさに概念同士の関係や属するカテゴリーを意識しながら概念を生成したということです。昨年初めて互いの関係を意識しながら行う概念生成を学んだ私ですが、一人で行うと概念名の細かい表現にとらわれて、いつしか全体がみえなくなっていたように思います。もっと大胆に全体をつかみながら（分析テーマに忠実に）概念生成を・・・というのが今回の学びでした。

今年の参加者とは昨年とはまた違った新たな気づきや振り返りができました。異なる職種の間でケアラーのネットワークが広がり、興味深い研究の話題にも触れることができ、この夏自らの研究を進めるにあたり、あまりある刺激をいただきました。皆様どうもありがとうございました。

河先俊子（フェリス女学院大学）

濃厚な充実した2日間でした。修正版グラウンデッド・セオリーを実際に体験できたこと、正確に言うと木下先生、グループリーダーの佐川さん、阿部さんのお導きにより疑似体験させていただいたことで、使いこなすためのポイントが分かったように思います。一

つ目のポイントは分析テーマの設定だと思いますが、データから誰が、誰に対して、どうするのかということを明確にしながら丁寧に言語化していくこと、データから見える動きをどの角度からどのくらいズーム・インして捉えるか決めることが重要であることが分かりました。今回は分析テーマが明確に決まっていたため、概念生成自体はとてもスムーズにできました。このことから分析テーマがいかに重要であるかを実感しました。二つ目のポイントは生成された概念、あるいはまだ生成されていない概念も考慮しながら、概念間の関係性を考察し、カテゴリーを作っていくところです。概念間の比較は私にとって議論についていくことが難しかったのですが、グループリーダーの指導の下に結果図まで辿り着いた時には達成感がありました。勘違いながらも M-GTA を使ったという実感が持てたことも大きな収穫であったと思います。また、夜の宴会もいい思い出になりました。ほとんど初対面の人ばかりでしたが、木下先生たちのお部屋に集まってみんなで歓談したことも、私にとってとても刺激的な経験でした。これも木下先生、世話人の方の求心力のなせる業だと思います。この合宿に参加したことと、自分のデータをうまく分析できることとの間にはやはりギャップがあると思いますが、新鮮な感動が残っているうちに、データ収集、分析と進めていきたいと思っています。

.....

新鞍真理子（富山大学）

研究合宿は、2006 年の栃木での開催から始まり、今年で 3 回目になると思います。特に今回は、初めて参加される方を優先的に募集された研究合宿でした。しかし、私には、幸運にも、いや、ずうずうしくも、3 回とも参加させて頂くことができました。

第 1 回目は、「概念の作り方は、これでいいのかな?」「この内容は、どの概念の具体例になるのかな?」とか、作業手順をなぞっていたように思います。そういえば、先日、老年看護学会の研修で、栃木の合宿のお世話をされていた亀山直子先生に偶然お会いしました。懐かしかったです。

第 2 回目の時は、「話の内容を整理する事と、分析することは違うんだ」「個別の 1 事例として内容を検討することと、他の事例にも共通する概念を作ることは違うんだ」「概念名は、具体的すぎても、抽象的すぎてもダメなんだ。最初から言い当てるのは難しい…」「分析テーマをきちんと絞り込まないと概念も曖昧になるんだ」など、自分の知識の軌道修正や留意点を確認することができました。グループワークの課題は難しいと感じたのですが、朝夕の神の湯温泉に癒されて、疲れは全く残りませんでした。

そして、今回の合宿では、「とりあえずの概念名も有りかな」「一人分の逐語録の全体を良く読み、おおよその概念の見当をつけながら、インタビューの冒頭から概念になりそうな具体例を丁寧に拾っていく方法もあれば、全体の中で、まず自分が一番気になった内容や具体例に着目し、概念を作っていく方法も有りかな」「同じデータを使っても、分析テーマが異なると、結果（説明する内容）も異なるのは当たり前、だよね…」など、方法の許容

範囲が広がったように思えます。

そして、3回目の合宿にて、ようやく「M-GTA はこんな感じかな、これでいいのかな」という感覚を掴むことができ、「もしかしたら、やれそうかも」と思えるようになりました。もうそろそろ合宿を修了して、論文を作成するという実践活動へ進まなければならないことを自覚しました。時間は掛かりましたが、私自身、合宿に参加することで成長できたように思えます。参加させて頂きありがとうございました。世話人およびメンバーの皆様に感謝申し上げます。

.....

大森佐知子（名古屋市立大学大学院看護学研究科感染予防看護学専攻 D3）

私は、今回初めて M-GTA 研究合宿に参加しました。合宿に参加しながら、2001 年に「グラウンデッド・セオリー・アプローチ 質的実証研究の再生」と出会い、当時、保健師をしながら、大阪の若者を対象とした自由記述式の質問紙調査とフォーカス・グループ・インタビューを共同研究者の一人として実施し、他の研究者と分析の視点を模索していたことを改めて思い返していました。当時は GTA 自体の解釈よりも、そこに説明されている言葉の一つ一つを理解すること自体おぼつかない状況で、十分な分析ができないまま、データをお蔵入りさせてしまったことを改めて反省しました。そして、現在、大学院博士課程後期になり、また、インタビューを M-GTA で分析をすること決め、最終年度で瀬戸際にも関わらず、未だ概念が思うように作れず、モヤモヤし分析ワークシート恐怖症に陥りながら、日々データと格闘する毎日でした。

今回の合宿に参加するにあたり、“分からなくてもどんどん皆さんへ質問や意見をぶつけてみよう！”と心に誓い2日間を過ごしました。合宿前にデータを読み込んでいたものの、皆さんと分析テーマを考え、そこから概念やカテゴリーを導き出すプロセスを共に歩むことにより、自分では気付けなかった視点や、グループ間でのデータのとらえる幅の違いなど色々な視点を学ぶことができました。そして、何よりも、皆さんと共にならばモヤモヤ感もある意味とても楽しく、つつい温泉の中でもお互いのグループでどのような分析プロセスを歩んでいるのかを温泉ミーティングをしながら、つつい長湯で少しのぼせてしまいました。今回の合宿で学んだことを再度振り返り、「グラウンデッド・セオリー・アプローチ 質的実証研究の再生」を改めて読み返しました。そして、本を読み進めながら木下先生のお顔を思い浮かべながら、以前とは違い、言葉がしみ込んでくる感じがしました。未だ“解釈の醍醐味としての「分かった」感”には到達できていませんが、あきらめずデータと対話を続けていこうと思います。

.....

山元公美子（山口大学大学院医学系研究科博士課程前期1年）

この度 M-GTA の夏合宿に参加させて頂き、実りの多い研修となりました。ありがとうご

ざいました。

今まで数回に渡り、M-GTA の研究会には出席させて頂いておりましたが、どのようにして分析が進められてきたのか、初心者の私としては十分に理解できていない状態だったと思います。分析テーマの絞り込みから概念生成、カテゴリー生成の過程を実際に行うことで、データからどのように理論を導き出していけばよいのか、そのイメージをつかむことが出来ました。スーパーバイズを受けるまでは、ついつい概念名を堅い言葉で表現してしまいがちだったのですが、データに基づいた分かりやすい概念名をつけることが重要であることを学びました。また、データの表面にある言葉に惑わされて、その本来の意味合いをくみ取ることが非常に難しいなと実感致しました。

私自身は若年妊婦さんを対象にした研究をしており、インタビュー技術が未熟であることも重なり、なかなか多くを語ってもらえない悩みを抱えておりました。夏合宿では日頃の研究会ではなかなか相談しにくい具体的な内容についても気軽に尋ねすることができ、非常に有意義な時間を過ごさせて頂くことが出来ました。研修で得た知識を十分に自分の研究に生かしていけるよう、努力して参りたいと思います。ありがとうございました。

.....

歌川孝子（新潟大学大学院保健学研究科博士後期課程）

今日の新潟は、昨夜からの雨で湿気が多く梅雨明けとは縁遠い気候です。

早いもので合宿が終わってから 3 日が過ぎようとしています、あの時感じた充実感は今もって 3 日前のままです。

地域保健という分野で 30 年余り市町村や地区住民を対象に仕事をし、修士論文を量的研究で仕上げた者が、なぜ今になって質的研究に取り組むことになった（この表現ではいかにも受身的ですが、最終的に決心したのは自分自身です）のか・・・？今もって自分でも不思議です。

前置きが長くなりましたが、今回参加して得たものは以下のとおりです。

- ① M-GTA の手法を直接学ぶことができ、今後の取り組みについて具体的にイメージできた。また、今まで持っていた疑問点が解消した。
- ② 自分の研究テーマに M-GTA を使うことの妥当性が確認できた。
- ③ 参加メンバーと研究に関する情報交換や私的な交流ができた。

実際、木下先生のテキスト 4 冊を何回か読みましたが、なかなか具体的なイメージにならず、これからこの手法に取り組もう（取り組まねばならない）と思っている者にとっては非常に有意義な合宿でした。

ただ、1 つ残念なことは最後のワインセミナーに参加できなかったことです。

又来年、もし初心者以外の者にも合宿の窓口を広げていただければ、ぜひ参加させてください。

.....

伊藤文子（新潟大学大学院保健学研究科博士前期課程）

私は、今まで研究会に参加したことがなかったので、木下先生の4冊の本を頼りに、M-GTAを用いて検討しても、はたしてこれでいいのかという不安がいつもありました。

合宿では、グループワークで、実際に結果図作成までの一連の作業を行ってみて、また、世話人の先生方からも的確なアドバイスをいただくことができ、混沌とした状態から、自分はどこがわからなかったのかがわかりました。定義づけに苦慮していましたが、それは「センス」だそうですので、めげずに繰り返し検討していくしかないのだと思いました。また、お風呂の中でも自然に「あの定義は」など、ミーティングがはじまりましたが、のぼせてしまい、途中退席はとても残念でした。夜の懇親会でも、雑談の中から思わぬ情報が得られ、とても有意義な2日間の体験となりました。合宿での学びを自分の研究課題に生かしていきたいと考えています。

集合した駅から、自分だけが場違いなところに来てしまったと後悔しましたが、最終的には合宿に参加でき、研究への道筋ができたように思います。木下先生はじめ、世話人の先生方、合宿に参加された皆様、お世話になりました。ありがとうございました。

.....

鈴木依子（京都女子大学）

今回の合宿では、大変お世話になりました。

実は、合宿に参加する手続きをしたものの、初心者身としては不安でいっぱいでした。話し合いが始まってからも、事例の読み込み不足を感じたり、適切な概念名が浮かばなかったりと、緊張の連続だったように思います。ただ、アドバイザーの先生方や皆さんのご意見は大変参考になりました。

合宿の目的はM-GTAによる分析方法の理解を深めるということでしたが、私の場合は、ようやくM-GTAの入り口にたどり着いた感じでした。それでも、分析テーマの設定方法や概念名のつけ方など、実際に体験したことで、一歩前に踏み出せたように思います。

ただ、仕事の都合で、1日目だけの参加となってしまう、カテゴリーと概念の相互関係や、その結果図などについての話し合いに参加できなかったことが悔やまれています。

でも、勇気を出して、この合宿に参加して、大変有意義な時間を、皆さんと共有することができましたことを本当に感謝しています。

ありがとうございました。

.....

若杉里実（愛知医科大学看護学部）

夏の研究合宿を昨年度は仕事の都合で断念し、“今年は絶対参加する”と心に決めて参加させていただきました。木下先生のグラウンデッド・セオリー・アプローチの本が新しく

出版されるたびに購入し読ませていただくとともに、M-GTAの研究会にも回数は少ないのですが参加し学ばせていただいております。

でも、やはり、いま一つ分析方法が自分のものとしてつかめないまま日々が過ぎていました。今回夏の研究合宿に参加し短時間ではありましたが、分析テーマを設定し、概念生成していくプロセスを体験し、分析テーマをきちんと設定するとその後のデータ分析が“ぶれずに”進んでいくので、分析して何を明確にしていきたいのかをきちんと決めることの重要性を実感しました。また、データの同じ部分に着目しても、動きをどう捉えて定義、概念名をつけていくかの難しさもわかりました。

グループメンバーの意見から、別の視点に気づかされたり、より深くデータの意味を読み込むことにつながったりと、学びの相互作用ができたことも楽しかったです。もっと学びたかったという気持ちもありますが、今回学んだことを活かして、自分のデータと向き合っていくためのパワーをいただいた気がします。

ご多忙の中、研究合宿を企画してくださりご教示くださった、木下先生はじめ世話人の方々に深く感謝を申し上げます。今後もできる限りM-GTAの研究会に参加させていただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

.....

阿部康子（愛媛県立内子高等学校）

以前、木下先生が当初書かれた2冊の本を頼りに、修士論文を作成しましたが、自分自身十分納得できていなかったため、一から勉強をしようと思って、研究会にポツポツと参加してきました。しかし、ポツポツという参加であるためなかなか納得するところまではいきませんでした。今回、研究合宿に参加して、集中的に、分析テーマの設定、概念・カテゴリの生成までを経験し、やっと自分自身納得しかけてきたなと手応えを感じることができました。

現在、修士論文も投稿することなく大事に手元に持っていますが、発表や投稿をしないといけないと、次ぎのステップへ進めないことも感じることができました。

また、木下先生をはじめ、世話人の方々のやさしい御指導をいただき、指導者がいつでも手を差し伸べていただくことができるという安心感、また、研究仲間がいるという安心感を得ることができ、大変価値ある合宿でした。

.....

安藤晴美（埼玉医科大学）

合宿の1週間前の週末、自分のインタビューデータと睨めっこ…。しかし、何も進まなかった。またしても行詰り。無駄な時間を費やしてしまった～という焦りを抑え、もう一度、木下先生の本を読み返すことにしてみた。

合宿当日、M-GTAの何かの収穫を求めて山梨に向かった。「データ提供者による研究の概

要説明」が終わり、「データの読み込み」「分析テーマの設定」の時間、これが第一の難関だった。提供して頂いたデータを何度読み直しても漠然とした感覚のままであったが、グループの方々の意見を聴きいていると、頭の中が整理され、まとまっていった（まとめて頂いた）。いつもの自分は「分析テーマの設定」に甘さがあったこと、そして、行詰る根源がそこにあり、現時点の一番難しいところであることを自覚した。分析テーマが定まると何故か気分が少し変わった。おそらく、自分一人の考えではないということに力強さを感じたのだと思う。

次の概念生成、カテゴリー生成の過程では、データの解釈、概念やカテゴリーの命名が難しい。特にデータの解釈は、提供して頂いたデータのため、適度な距離感をもてて見えてくるもの、また逆に、解釈したことに確信がないことから不安に思えるものなどと色々ある。そして、思うことは、自分のデータだとしたら・・・

合宿では、グループの方々、参加者の方々と M-GTA の過程を実体験することができ、本を読み返したことの实演を見ることができたように思えた。このことより、行詰ったデータの分析に、再度、取り組んでみたいという活力を頂けた。まだ「収穫した」といえる学びはまだ見えていない。合宿で体験したことを振り返り、実際に分析を進めながら学びを見付けていきたいと思う。

木下先生、お世話人をしてくださった先生方、参加された方々、どうもありがとうございました。今後ともよろしくお願いいたします。

.....

塚原節子（岐阜大学）

岐阜は連日 35℃以上を越える猛暑に見舞われていました。そこを抜け出せるのならどんな所でも良いと思っていました。山梨は内陸にありますが、それでも、日中との寒暖の差があり、寝苦しい夜はないだろうと期待していました。しかし、その期待はことごとく裏切られました。それは、昼夜を問わない皆さんの白熱したディスカッションのせいでしょうか・・・

合宿研修会へは、今回2回目の参加でした。私の役割は、参加者 B グループに対するファシリテーターとしての参加ということでした。そこで今回わたしが学んだことについて少し述べます。もちろんグループワークでの学びはたくさんありますが今回は違った角度からの学びを整理してみました。一つには事前学習の大切さです。グループメンバーからの積極的な意見交換は、どなたも木下先生が出版された本の一冊以上は、きっとぼろぼろになるくらい手にし、読まれていると感じました。それと同時に、提供された事例に関しても、熟読して参加していただいたように感じました。このことが短時間での概念とカテゴリー生成そして概念間カテゴリー間の2事例からある程度の関係性を示すことができたと感じました。二つ目には誰もが同じ方向を向いているということです。メンバーの誰もが、自分の修論もしくは博論を仕上げたいと思っている。もしくは、それぞれ何らかのテーマ

をもって M-GTA で分析したいと思っているということです。この思いが短時間での集中力につながるの、2 事例の分析過程から、自分の思っている分析手法の確認へとつなげていたのではないかと感じられました。三つ目には、提示された資料はそのままの状態を持ち込むことです。私はそのままに印刷せず、余白を少なくするため編集して持を探すのに苦勞し、また皆さんにもご迷惑をおかけしたのではないかと思います。資料は、編集しても行番号をつける程度にして、大きく編集してはいけないと学びました。四つ目には、食事終了後の二次会には参加することです。どうしても木下先生と研修会企画運営の中心の人たちに偏ってしまいますが、そこでの会話は互いの情報交換にもなりますし、なんといっても、木下先生や他の人たちのお人柄に触れることもできます。今回は風呂上がりに皆さんが参加してくださってとても良かったと思っています。まだまだありますが、長くなりましたのでこの辺りにしておきます。

今回はファシリテーターとして十分にその役割を果たせたかどうか分かりませんが、研修会や研究会で刺激を受けつつ私も早く博論を終えようと強く感じた今回の研修合宿でした。皆様ありがとうございました。そしてご苦勞様でした。

◇新刊のご案内

研究会会員である横山登志子さん（北海道医療大学）の『ソーシャルワーク感覚』が6月30日、弘文堂より出版されました。M-GTA シリーズの第6巻となります。

医療現場における矛盾や葛藤に、どのように向き合うか？ ソーシャルワーカーが現場での経験を通して、どのような援助感を生成しているのかについて独自の視点から問題提起を行い、M-GTA を用いて分析した調査結果が論じられています。

M-GTA の分析例という面からだけではなく、ソーシャルワークのみならず臨床の現場にある方々が、この研究成果から学ぶことも多いと思います。

◇ 近況報告:私の研究

田中美知代（医療法人 協仁会 小松病院 臨床心理士）

M-GTA の皆さま、こんにちは。いつもニュースレターを通して皆さまの研究の動向を学ばせていただいております。今回は自己紹介を兼ねて、今後、私が研究していきたいことについて報告させていただきます。

私が、M-GTA 研究会に出会ったのは、2004 年の秋でした。修士論文研究の分析方法として M-GTA を使いたいと思っておりましたものの、実際にはわかっていない部分の方が多く、困っていた所、山崎浩司先生を通して M-GTA 研究会をご紹介いただきました。その年に島根県で開催された公開研究会にも参加させていただき、本当に M-GTA を一から学ば

せていただき、M-GTA の奥深さを感じたことを覚えております。同年 12 月には研究会にて発表もさせていただき、皆さまから貴重なご意見をいただき、修士論文“乳がん手術を体験した患者のストレス生成プロセスに関する研究—乳がん術後の患者の語りより—”を仕上げることができました。

現在、私は、臨床心理士として、緩和ケア病棟でターミナルのがんの患者さまとそのご家族の心のケアを主に行っております。緩和ケア病棟では、さまざまな患者さまやご家族との出会いと別れがありますが、人間の人生における尊い瞬間の一つである死の瞬間にも立ち合わせていただき、本当に、貴重な経験をさせていただいており、日々、患者さまやご家族から多くのことを学ばせていただいております。

そして、私が最も難しいと感じており、関心があることは、患者さまのスピリチュアルな痛み（スピリチュアルペイン）についてであり、なんらかの形でスピリチュアルペインについて研究することができたらと考えています。現場では、身体的な痛みを軽減させることはかなり可能になってきていますが、心理的、社会的、スピリチュアルな痛みの軽減のための援助は、それぞれの痛みの内容がその人の生きて来られたこれまでの人生によって、左右されることが多いため、難しいことであると感じています。まだまだ構想にも至らないところでの思いのみではありますが、将来的には、研究を通して得られたものを現場に還元していけたらと思っております。

.....

「質的研究再考」

林葉子（跡見学園女子大学 非常勤講師）

近況報告といえば、まずは、大学院に入学したときから、約 10 年間つきあってきた課題をやったのことで、昨年暮れにまとめあげることができたことである。そのことについては前会長の青木信雄先生をはじめとして、木下先生、そして、研究会の皆さんの助言に助けられてきたことに深く感謝したい。

その青木先生から 1999 年に、一緒に質的研究法の勉強会を開かないかと誘われ、木下先生と、グラウンデッド・セオリーを紹介していただいたことから、私の質的研究法、特に M-GTA を使った研究が始まった。しかし、この 10 年間の研究生活を振り返ってみると、自分のデータを持ってから深く勉強した質的研究法は、M-GTA だけであったことに気がついた。私は、次の研究課題を始める前に、もう一度、研究方法を勉強したいと思っていた。そのときに、母校の D ゼミで、N. K. デンジン編の質的研究ハンドブック（平山満義 監訳、2006、『質的研究ハンドブック』1 巻～3 巻、北大路書房＝Denzin, N. K. & Lincoln, Y. S., ed., 2000, “Handbook of qualitative research, second edition”, Sage Publication Inc.）を読むという話を聞いて、前期のゼミに参加させていただいた。7 月にはいって、8 割ほど読み終えた。エスノメソドロジー、グラウンデッド・セオリー、分析的エスノグラフィー、言説分析、内容分析、カルチュラル・スタディーズなど、様々な質的分析法に加え、質的研

究のパラダイムやパースペクティブ、理論（特に質的研究の認識論的立場）など、各章とも読み応えのある内容であった。しかし、どの質的研究法を用いるにせよ、質的研究において、常に大切にしていかなければならないポイントがあることに気がついた。それは、質的研究が自己内省的なものであることを認識することであり、研究は再帰性に注意が払われており、同時に（利害）関係者のための研究であること。そして、妥当性の証明などいくつか問題となっていることを克服しつつ、質的研究は、研究者の明確化された立場から、結果が納得のいく物語を語っていることである。

驚いたことに、これらの質的研究法において共通する重要なポイントは、M-GTA を勉強しているときに、すでに、知らず知らずのうちに身につけていたことであった。M-GTA の分析方法は、他の質的研究法を用いる場合にも、基本的なところで役に立つものであることを知り、私たちの研究会の意義を改めて、思い知った今日この頃であった。

.....

富塚（旧姓：酒井）都仁子（千葉市立宮崎小学校 養護教諭）

皆様、ご無沙汰しております。約7年前の修士論文の際にお世話になりました酒井です。もう7年も経ったのかと思うと、本当に時の経つはやさにびっくりしてしまいます。入会したての時は皆さんの討議についていけなかった私ですが、木下先生をはじめ、会員のみなさまの温かいご指導（研究会だけでなく、飲み会でのご指導もすごく勉強になりました）のおかげで『保健室の頻回来室者にとっての保健室の意味深まりプロセス』をテーマに修士論文をかくことができました。そして、その翌年には、何と、新潟での公開研究会でシンポジストとして発表をさせていただく機会もいただきました。20代前半のびよっくにそのような貴重な機会をくださるなんて、初めは冗談かと思いましたが、佐川さんのご協力のもと、発表をさせていただき、充実感いっぱいの会になりました。その後、研究の方は、修士論文を2つにわけ、修了後3年後と4年後とだいぶ時間はかかったものの、2つの学会誌に掲載され、無事に会員の義務を果たすことができました。そしてその頃、またまた何と『分野別実践編』の執筆という貴重な機会をいただきました。M-GTA研究会ではGTを学ばせていただいたうえに、いくつもの貴重な経験をさせていただき、そして飲み会等での楽しい思い出もつくらせていただき、本当に感謝しています。

その後ですが、私は結婚し、元気な男の子を昨年出産（3648g！）し、只今育児休暇中です。いつか、「うるせー、くぞばあ！」とか「うんでくれなんて頼んでねーよ」等々、言われる日がくるのかと思いながらも、今は「我が子ってなんてかわゆいのだろう」と、親ばか街道まっしぐら、日々とろけています。子どもの笑顔に脳みそも溶け始めてきますが、職場復帰した際にはまた参加させていただきたいと思っておりますので、どうぞ今後ともよろしく願いいたします。近況報告という貴重な機会をいただきありがとうございます。

◇連載・コラム

『死のアウェアネス理論』を読む（第6回）

山崎^{ひろし}浩司（東京大学）

1. はじめに

急いては事を仕損じる、ということばがある。嫌な格言である。私は急いた状況に追い込まれでもしないと、なかなか物事を始めない人間である。ということは、先の格言によれば、やる事なす事の多くを仕損じることになる。が、実際にはそれほど悲惨な結果にはなっていない（と本人は思っている）。だが、前回のコラムの前半部分は、自分で読み返しても論点がよくわからなかった。見事に仕損じている。悲惨である。面目ありません。したがって今回は、前回書いた「2. グラウンデッド・セオリーの位置づけ」で、私が何を言わんとしていたかの再説明をさせていただこうと思う。第2章は、次回論じることにする。

2. 序論の役割

学位論文やモノグラフのように、ある程度の分量がある学術的著作では、最初の章は序論として位置づけられるのが普通である。そこでは、研究の目的と大まかな結果、学術的および社会的な意義、著作全体の構成などの提示が求められる。

『死のアウェアネス理論』においても、「第1章 終末認識の問題」はそうした役割を担っている。ここでは、『死のアウェアネス理論』で報告されている研究の目的を次節（2.1）で簡単におさらいし、つづいて2.2節で全体の構成について概観したうえで、2.3節で学術的意義と社会的意義について少し重点的に論じてみたい。学術的意義と社会的意義の議論に重点を置く理由は、この2つの意義が強調されているバランスについて考えることで、われわれが学べることがあるように思われるからだ。

2.1. 具体的目的と大まかな結論の提示

さて、本書で報告されている研究の目的は、前回のコラムを含めてこれまで何度となく確認してきたように、病院で死にゆく患者は医師・看護師・家族とどのような関係をもち、どのように彼らから扱われながら死んでゆくのか、を明らかにすることであった。そして、これを明らかにするために、 그레이ザーとスト劳斯は、終末期という医師による医学的判定（情報）をめぐる患者・病院スタッフ・家族の間の相互作用に照準したのだった。

こうした目的と分析視角の設定により、彼らは死にゆくことにまつわる「認識文脈」というグラウンデッド・セオリーの中核概念を生み出した――

「認識文脈」と呼ぶ概念は、相互作用に關与する1人ひとりが患者の医学的病状判定（defined status）について何を知っているか、そして彼が知っていることを他の人はどこまで知っているか、と彼自身思っているのか、ということの意味する。……

「認識文脈」は患者の病状判定を知りつつ、こうした人々が相互作用を行なう文脈を指す。(9-10 頁)

少し議論の本筋から外れるが、より厳密に言えば、彼らが領域密着的に明らかにしたのは単なる「認識文脈」ではなく、「死にゆくことの認識文脈 (dying awareness context)」である。現に、これが著作全体のタイトル (Awareness of Dying) のもとになっている。それをここでグレイザーとストラウスが「認識文脈」と表現しているのは、なぜだろうか。想像するに、それが「死にゆくことの認識文脈」よりも端的な表現であるから、または対象現象が死にゆくことに関連していることは前提されているから、といったことにとどまらない理由がそこにはあるのではないか。つまり、死にゆくことにまつわる現象という領域を超えて、彼らは「認識文脈」理論がフォーマル理論として通用することを予見または期待していたために、「死にゆくこと」を削った可能性である――

……死に向かうという現象に関連した概念に「認識文脈¹」というものがあるが、この文脈に関するわれわれの理論には、二つの重要な特性がある。それは「認識 (awareness) に通じる手がかりと、その場に関与するさまざまな当事者らが気づくようになる際に関わってくる個人的利害関心である。現在、われわれは「認識文脈」のフォーマル理論を産出するにあたって、スパイとか建築下請人というような集団を研究することによって利害関心や手がかりに関する一般法則を展開しているところである。(グレイザー&ストラウス, 1996: 47)

序論における大まかな結論の提示の時点で、すでにこうしたフォーマル理論への格上げの可能性をグレイザーとストラウスが念頭に置いていたとすれば、それは何を意味しているのだろうか。それはおそらく、彼らが「社会生活の『かくあるべきこと』に関する論理的な諸前提や思弁から産み出されてくる『誇大』理論とは対照的」(グレイザー&ストラウス, 1996: 47) で、有効性と影響力の面でもさらにすぐれた社会学理論を、社会学者として産出すべきだと考えていたことを意味する。(この点は、『死のアウェアネス理論』の結論部分の考察の際に、再び触れることになる。)

2.2. 著作全体の構成の提示

議論を本筋に戻し、研究の目的と大まかな結論の提示に続く、著作全体の構成の提示を次はみてゆくことにしよう。

まず、第 1 部を第 1 章とともに構成する第 2 章の内容は、患者自身を含むすべての相互作用者が行なう、患者が死にゆく過程のどの段階にいるのかの判断を規定する要因を論じている、と説明されている (9 頁脚注)。この章は、いわば、死にゆくことにまつわる関係者間の相互作用の特徴をより明確にするための補章であり、その後示される分析結果の基盤をより盤石なものにする役割を担っている。

第 2 部に該当する第 3 章から第 7 章では、相互作用者を患者と医療スタッフ (医師と看

護師)に限定し、さらに「論点を明確にするために、スタッフは皆、同じ病状認識を共有しているかのように行動すると仮定」(10 頁)して、両者の間で展開する認識文脈の種類を論じる、と解説されている。

つづく第 3 部を構成する第 8 章から第 13 章では、「スタッフ間のコンセンサスを仮定せず、病状認識の一致・不一致をめぐるいろいろな状況下で何が起きるか」(10 頁)——つまり、認識文脈にまつわる諸問題——を議論する、と述べられている。

最後の第 4 部にあたる第 14 章と第 15 章では、それぞれ「アウェアネス理論の実践的活用」・「アウェアネスと社会的相互作用の研究」と題されているように、臨床現場と社会学分野における相互作用理論それぞれに、この研究で生成された知見がどのように位置づけられ、活かされるべきなのを示す(12 頁)、と説明されている。換言すれば、実践的・理論的・方法論的の 3 点すべてについて、自分たちの研究がどのような貢献をなしたのかを、結論にあたる第 4 部でグレイザーとストラウスは論じている。

2.3. 学術的意義と社会的意義の強調バランス

グレイザーとストラウスは、以上のように著作全体の構成を説明した後で、「本書をこのように構成することで、私たちは実践的問題と理論的問題への二重の関心を結合しようとした」(12 頁)と述べている。言い換えれば、研究の社会的意義と学術的意義とを、どちらも同じようにバランスよく強調することを、彼らは本書で試みたといえる。

まず、『死のアウェアネス理論』を生み出した調査研究の社会的意義だが、それは終末期ケア状況の改善に貢献する知見の生成にあった。誰のためにそうした知見を生成するのかといえば、それは社会一般の人びとのためである。(だから、「社会的」意義と呼ばれる。)より具体的には、この調査研究で対象となっている死にゆく患者自身とその家族、そして医師や看護師などの医療スタッフのためである。

一方、この研究の学術的意義だが、それは社会学における理論的發展に貢献する知見を生成することにあった。これは誰のためかといえば、当然、社会学者のためである。(したがって、ここでいう「学術的意義」は、「社会学的意義」と置き換えることができる。)さらに具体的にどのような社会学者のために知見を生成するかといえば、社会的相互作用論に関心のある者たちのためである。

このように研究の社会的意義と学術的意義を見直してみると、われわれ研究者は、研究を通して同時に 2 つのコミュニティの期待を満たさねばならないことがわかるだろう。1 つは一般社会のコミュニティであり、もう一つは自分の属する学問分野のコミュニティである²。別の言い方をすれば、自分の研究がたとえ一般コミュニティを非常に満足させるものであったとしても、それが自分の専門領域のコミュニティにとって何も資するものがなかったり、あるいは専門分野コミュニティを満足させられても、一般コミュニティにとって無益であったりすれば、研究としては片手落ちであるということだ³。

グレイザーとストラウスは、この点を彼らの調査報告に対して想定される読者層の問題

としてもとらえており、次のようにまとめている――

本書は読者層として、病院で死の問題に関わっている人々（とくに死の問題に対処しなくてはならない人々）と、社会学者（とくに社会的相互作用を研究している人々）を想定している。つまり、本書は実戦応用につながる詳しい情報や知識の提供と、その理論的諸側面の提示を意図している。（7頁）

このように、研究報告の対象となる読者層をつねに 2 種類想定しておくことは、社会的・実践的意義と学術的意義を明確にする一助になると思われる。これは、専門職者として現場をもちながら研究にも携わる研究者にとっても、等しく通用する。

例として、看護師として臨床現場で働きながら看護研究を行なう者は、自分の研究の読者として、たとえば現場の看護師と看護学研究者の 2 種類を想定することになる。言うまでもないだろうが、自分が両者にまたがるからといって、「看護にとって資する知見」と曖昧にしてはまずい。看護師コミュニティと看護学研究者コミュニティとは、重なる部分もあるが重なっていない部分も大きい。ならば、この 2 つのコミュニティは関連しながらも別のものとみなすべきである。筆者の印象では、両者が無意識的に混同された研究では、研究の社会的意義（看護実践への貢献）は比較的明確だが、学術的意義（看護学理論・方法論・実証的知見の蓄積への貢献）が不明瞭なものが少なくないように思われる。

学術的意義を明確に意識するためには、自分の研究が位置づけられる学問分野について、自分なりの言葉でなるべく明確に理解できていなければならない。その理解は決して網羅的である必要はなく、自分の研究がテーマ的・方法論的・理論的に、その分野においてどのように位置づけられるのかを検討してゆく過程において、把握できる限りの理解でまずはかまわない。（この点については、次の 3 節で具体例をあげて詳述したいと思う。）

どんなに歴史の浅い領域であっても、「学」として成立しているということは、それなりの蓄積があるということである。理論的蓄積や方法論的蓄積のない学問分野は存在しない。そして、実証的な分野であれば、実証的な知見の蓄積ももちろんある。こうした蓄積（または潮流）を把握するために、各学問分野は概論をもっているわけであり、個別の研究においては先行研究レビューが必要になってくるわけである。

『死のアウエアネス理論』の場合、 그레이ザーとスト劳斯は本書全体を通して随所で、自分たちの研究を社会学の理論的・方法論的・知見的蓄積のうちに、明確に位置づけている。とくに第 1 章では、「社会秩序と相互作用の分析」という節（13-15 頁）で、社会学における相互作用論という理論的潮流のうちに、自分たちの研究がどのように位置づけられるかを、ジョージ・ハーバート・ミードやアーヴィン・ゴフマンの理論との対比のもとに示している。たとえば、ゴフマンの相互作用論と自分たちの相互作用論（認識文脈理論）との違いを、 그레이ザーとスト劳斯は次のように論じている。少し長いが引用する――

『集りの構造』において、アーヴィン・ゴフマンは、相互作用を微妙に統制し、それを社会秩序の具体的表現としていく社会的諸規則の視点から、相互作用を分析し

ている。私たちはそうした規則を認めるのだが、ゴフマンとは対照的に、相互作用をその開放的特性と不確定的特性の視点から分析することにもっぱら関心を抱いているのである。相互作用の安定性に焦点を置くよりも、本書は、相互作用の展開過程で生ずる変化に主眼を置いた。もっとも、比較的安定した相互作用や純粋に反復的な相互作用にしても、相互作用を統制する諸規則を単に詳述するといったこと以上の分析が必要とされるのではなかろうか。なぜなら、変化や予測不能な出来事に絶えずさらされながらも、そうした安定性が保たれるための戦術をも考察しなくてはならないからであり、さらには、諸規則と社会秩序の「調整的」基盤の双方を組み合わせなくてはならないからである。したがって、死にゆく患者を中心とする相互作用を説明するにあたり、私たちは相互作用に含まれる社会的諸規則や他の構造的条件だけでなく、規則で定められた社会的拘束範囲からはみ出したり、新たな相互作用の様式に移行したりする、相互作用に固有の創造的な傾向にも関心をもったのである。(14-15 頁)

『死のアウェアネス理論』は、このようにしてその学術的意義を明確化している。と同時に、原書のバックカバーにも記されているように、「死にゆく患者をとりまく状況で生ずる多くの倫理的・私的問題に直面するチャプレン、ソーシャルワーカー、看護師そして医師にとって、有用な手引書であることは証明済みである」といわれるほど、明確に社会的・実践的意義も表明されている。こうした両者のバランスが、われわれの研究にも求められている。

3. 自分の研究の位置づけ

自分の研究がどの学問分野の研究かを問われ、その答えに窮することはあまりないことかもしれない。しかし、研究テーマが学際的で、自分の所属する大学院にたとえば「人間・環境学研究科」などという得体のしれない看板がかかっている場合、自分の学問的な軸足がぶれてしまう可能性もある。こうした状況下で、自分の研究を位置づけるべき学問分野を自分なりの言葉で明確に理解するためには、社会学や心理学といった比較的明確な枠組みをもった大学院に所属している場合よりも、なお一層の努力が必要かもしれない。『死のアウェアネス理論』に関する直接的な議論からは離れるが、この学術的意義にまつわる点について、筆者自身の例をもとに、もう少しここで論じてみようと思う。

筆者は博士論文研究において、そもそも自分が何学の領域の研究をしているのかが当初は明確でなかった。性的に活発な地方高校生のコンドーム使用・不使用に関する調査研究ということで、テーマ的には疫学・公衆衛生学・保健学といった社会医学的な分野が考えられた。ただ、対象者の文化にフォーカスするという意味では文化人類学的な研究にすることもできた。さらに、フォーカスグループや M-GTA といった質的な方法論を活用していたことと、シンボリック相互作用論という理論を視野に入れていたので、社会学的な研究にすることもできた。

大別すると、社会医学と文化人類学・社会学は、前者が健康増進といった実益に結びつく知見を生成し、「すべき」を提示することを使命としているのに対し、後者は応用人類学や応用社会学でない限り、社会現象の解明をし、「である」を提示することを基本的な目標としている点で異なっている。したがって、自分の研究を前者あるいは後者として位置づけるかで、その内容は大幅に変わってくる。筆者は当初この点を曖昧にしたまま原稿を書き上げたので、結局どの分野の研究で、何を目標にしているのかが至極曖昧な博士論文になってしまい、査読者たちから散々この点を突っ込まれた。木下先生にも、「これは何学の研究なのですか？」と問いかけられた。

この問いに明確に答えるために、筆者はまず自分の研究の目的を、性的に活発な高校生の性の健康増進（セクシャルヘルス・プロモーション）に資する知見を生成すること、つまり「すべき」を提示することに定めた。しかし、同時に対象者の文化や、シンボリック相互作用論的な観点から彼らの行動や認識を探り、フォーカスグループや M-GTA を活用して知見を生成することを許容する学問分野はないかと考えた。

社会医学的な枠組のなかでその可能性を検討してみると、健康行動科学という学問分野の存在がクローズアップされてきた。定義によれば健康行動科学とは、「心理学、社会学、人類学、生理学などを総合的に応用し、人間の健康問題にかかわる行動（個人・集団・社会）の変容過程を実証的、体系論的に解明しよう」と試みる応用科学であり、「医療社会学、医療心理学、医療人類学等を含む」ものである⁴（日本保健医療行動科学会, 2005）。そして、この試みの成果は、少なくとも欧米においては、ヘルス・プロモーション（健康増進）に適用されてきたという。

こうして、やっと自分の研究を健康行動科学という学問分野に位置づけるめどが立った。そこで健康行動科学の理論的蓄積に目を向けると、これまでの理論の多くが長らく行動主義心理学と、健康行動の解明と変容を個人心理のレベルでとらえようとしてきた個人心理学に強い影響を受けてきたことが分かってきた（渡邊, 2003: 8; Crosby et al, 2002: 5）。そしてこの心理学に偏重したヘルス・プロモーションの潮流は、カウンセリングや小集団アプローチといった個別アプローチばかりを疾病予防にもたらし、そこに社会学、人類学、経済学、政治科学などの理論が活かされる余地はほとんどなかったということも、判明してきた（Green, 1984）。

個別アプローチではなく、対象集団全体に働きかけられるような、彼らの文化的・社会的枠組を活かしたアプローチを志向していた筆者は、そうしたアプローチを可能にする理論があるかどうか調べてみると、社会生態学モデルに行き当たった。社会生態学モデルでは、個人行動とその社会的・物理的環境の双方に着目し、それらを相互に影響しあうものととらえる（Stokols, 1992）。そのうえで、環境変容が個々人の行動変容を促す——つまり環境が独立変数で行動が従属変数である——という前提に立つ（McLeroy et al, 1988）。また、このモデルでは、人間の内面的要因、社会文化的要因、政策・法、物理的環境など、多様な環境がマルチレベルで健康行動に影響を及ぼすため、介入もマルチレベルのものが

もっとも効果的であるとされている (Sallis and Owen, 2002)。

この理論的モデルが、筆者の考えていたアプローチにもっとも近いと思われたが、社会生態学モデルでは、個人と環境とが相互独立的な要素としてとらえられていた点に違和感を覚えた。そこでは、両者が相互規定的な関係にあると説明されるときでも (McLeroy et al, 1988; Stokols, 1992)、言わば環境決定論的に、特定の作用 [= 影響] に対して被作用者はただ反応するだけかのように語られていた。しかし、実際には個々人が原因としての環境をどのように解釈するかによって、結果としての健康行動は変わってくる。つまり、まず注目すべき問題は、誰の視点を重点に「健康行動問題の原因を理解しようとする」かである。であるならば、環境に対する個々人の解釈の相違によって、どのような行動パターンが生み出されていくのかを、対象者の視点に迫って因果的に特定するアプローチが必要になってくる。

そこで筆者は、社会生態学モデルにシンボリック相互作用論を折衷し、環境決定論的ではなく、個々人の環境に対する解釈過程とそれと連動する行動変容や維持に注目する視点を導入した。そして、こうした現象を解明するには、従来の健康行動科学で多用されてきた量的手法ではなく、質的手法を活用する必要性を論じ、インタビュー調査の実施と M-GTA の採用を根拠づけた。

以上のように、筆者は自分の研究を大枠として健康行動科学／ヘルス・プロモーション——なかでもセクシャルヘルス・プロモーション——の研究として位置づけたうえで、理論的にも方法論的にもこの研究の位置づけを確認し、学術的意義を明確にしていた。ここでは、学際分野に筆者がいたことに少なからず起因する複雑さが見られたと思うが、たとえ長い伝統のもとに確立された分野に属している研究者でも、学位論文研究などを実施するに当たっては、上記と似たようなかたちで、自らの研究を理論的・方法論的・テーマ的に位置づけてゆく試みは実践せざるを得ない。

『死のアウェアネス理論』でも、この実践が確かにされていることは前節でみたとおりであるが、もっと強調するために読者には我田引水におつきあいいただいた。社会的意義の確認と同様に、学術的意義の確認がいかに重要であるかを十分に認識していただけたのなら幸いである。

4. 展望

第 1 章についてはこれで十分に論じられたので、次回こそは、第 2 章「死の予期の多様性：社会的定義の問題」を読んでゆきたい。端的に言えば、予測・憶測・勘ぐりといった行為をめぐる人びとの認識と行動のあり方を、病院で死にゆく患者を中心とした関係者間のやり取りというコンテキストに限定して考える枠組を、第 2 章は提供している。この章の考察は、M-GTA における現象特性や分析焦点者（分析ポイント）を理解する手助けになるのではないと思う。

- ¹ 引用元である『データ対話型理論の発見』では、「認識」ではなく「意識」、「認識文脈」ではなく「意識の文脈」と訳されているが、ここでは煩雑さを避けるために「認識」・「認識文脈」に改変して統一している。
- ² もちろん、この2つのコミュニティは部分的に重なっている。
- ³ こうした主張に対し、とくに一般社会に対して役立つ知見を生成する必要は必ずしもない、という主張も存在する。この主張のロジックには、たとえば、何が役立つかは特定の地域性や時代性の制約を受けるため、その場その時の有用性ばかりを考えて研究をしてしまうと、「〇〇に役立つ」という前提そのものを不問に付してしまい、実際にはその前提によって多大な不利益を被っているかもしれない人びとの存在を見落としてしまう危険性が大きくなる、というものがある。
- ⁴ 米国における定義でも、同様に「心理学、社会学、人類学、コミュニケーション論、看護学、マーケティング論」および「疫学、統計学、医学」などの影響・応用が認められるとある（Glanz et al, 2002: 4）。行動科学が、社会科学諸領域から数多くの理論や方法論を借り受けていることから、英語では「行動・社会科学[=behavioral and social sciences]」または「社会・行動科学[=social and behavioral sciences]」と併記されるケースがみられる（Crosby et al, 2002: 1; Gillies, 1998: 109）。

<引用文献>

- Crosby, RA, Kegler, MC, DiClemente, RJ (2002) “Understanding and applying theory in health promotion practice and research.” In RJ DiClemente, RA Crosby and MC Kegler, (eds.), *Emerging Theories in Health Promotion Practice and Research*. San Francisco, California: Jossey-Bass, pp. 1-15.
- Gillies, P (1998) 「HIV/AIDS 予防における社会・行動科学の貢献」 J Mann・D Tarantola 編『エイズ・パンデミック』山崎修道・木原正博監訳、東京：日本学会事務センター、109-130 頁。
- Glanz, K, Rimer, BK and Lewis, FM (eds.) (2002) *Health Behavior and Health Education*. San Francisco, California: Jossey-Bass.
- グレイザー, B・ストラウス, A (1988) 『死のアウトウェアネス理論と看護——死の認識と終末期ケア』木下康仁訳、東京：医学書院。
- グレイザー, B・ストラウス, A (1996) 『データ対話型理論の発見——調査からいかに理論をうみだすか』後藤隆・大出春江・水野節夫訳、東京：新曜社。
- Green, LW (1984) “Modifying and developing health behavior.” *Annual Review of Public Health*, 5: pp. 215-236.
- 木下康仁 (2003) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践——質的研究への誘い』東京：弘文堂。
- 木下康仁 (1999) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチ——質的実証研究の再生』東京：弘文堂。
- McLeroy, KR, Bibeau, D, Steckler, A and Glanz, K (1988) “An ecological perspective on

-
- health promotion programs.” *Health Education Quarterly*, 15(4): pp. 351-377.
- 日本保健医療行動科学会 (2005) 「日本保健医療行動科学会設立趣意書」『日本保健医療行動科学会論集』20 巻, 205 頁.
- Sallis, JF and Owen, N (2002) “Ecological models of health behaviour.” In K Glanz, BK Rimer, and FM Lewis (eds.) (2002) *Health Behavior and Health Education*. San Francisco, California: Jossey-Bass, pp. 462-484.
- Stokols, D (1992) “Establishing and maintaining healthy environments: toward a social ecology of health promotion.” *American Psychologist*, 47(1): pp. 6-22.
- 渡邊正樹 (2003) 「学習理論」畑栄一・土井由利子編『行動科学：健康づくりのための理論と応用』所収, 東京：南江堂, 7-15 頁.

【編集後記】

今号は夏合宿特集号として7、8月合併号でお送りしました。

早いもので合宿から1ヶ月が経とうとしています。参加されたみなさんに、たくさんの感想をお寄せいただきました。今回も私は世話人としてグループをナビゲートする役だったのですが、それは木下先生にすっかりお任せして、自分自身、分析を楽しんだ感があります。もちろんこれは提供していただいたデータが、濃くて分析しがいがあったことの要因も大きいと思います。自分で満足のいく概念ができたり、類似例、反対例が見つかって大まかな図が見えてくると、分析が楽しくなりますね。もうちょっとだけ時間があればなぁと名残惜しい気持ちがしたものでした。山梨から帰ってからは、さて来年はどこがいいかな、と、すでにあれこれ考えています。みなさんも、よい場所があったらお知らせ下さい。ただし、温泉付き、という条件でお願いしますね。

今、島根でこの編集後記を書いています。こちらも非常に暑いですが、かと思ったらすごい雨が降って涼しくなったり…。みなさんも体調を崩されませんよう。

オリンピックからも目が離せないのですが、そろそろ私も自分自身の課題に集中しないと、と焦る今日この頃です。

(佐川記)